

JISS

Spring 2007

「特集」 未来のメダリストを探せ！ タレント発掘が もたらすもの



和歌山県

＜S＞和歌山県には団体競技系の部活が減少している中学校が数多く存在します。このような中、例えば、受け皿としての地域に密着したスポーツクラブの活用や、様々な方法を模索していき、とされています。いずれにしても3年後までには何らかの答えを用意しておく必要があります。県内の競技団体と深くネットワークを組みながら進めていきたいと考えています。

＜J＞保護者の方の反応はどうですか？
S：非常にいいと思います。保護者の方にアンケートを実施したのですが、ほとんどの方がこれからも続けてほしい、という感想をもっていました。そういった意味ではニーズは非常に高いと思います。最終的に、続けていってよかったと言われようようなプロジェクトにしたいですね。



北海道 美深町 トランポリンからスキー・エアリアル 種目転向型のタレント発掘



美深町立美深小学校教諭 石坂 かおり氏

＜J＞S（以下、J）：美深町の事業について教えてください。
井上（以下、井）：美深町はトランポリンが盛んな町です。JOCの方から、世界的に見て、トランポリンからフリースタイルスキーのエアリアルへの種目転向が多いことを教えていただき、種目転向型のタレント発掘のいいトライアルが出来るのでは、とアドバイスをいただきました。これがきっかけです。

＜J＞トランポリン自体のレベルも高いのでしょうか？
井：そうですね。以前、世界ジュニアの優勝選手が美深町から出たことがありました。

石坂（以下、石）：美深町の小学生は180名ぐらいいるのですが、そのなかで約6割はスポーツ少年団に入っており、比較的スポーツが盛んな地域だと思います。この中でトランポリンをやっている子どもは20名ぐらいです。一番人気があるのはスキーの少年団です。

井：これはエアリアルの影響が大きいんですね。
石：2、3年前まで、スキーの少年団の人数はずっと減少傾向にあったんです。ここ1、2年は上昇傾向にあり、美深においては異常な盛り上がり状態にあると思います。

井：北海道自体、スキー人口は減少の一途にあります。それに対して美深町だけ上昇しています。その原因の分析はしていないのですが、このプロジェクトの影響だと思います。

＜J＞例えば、エアリアルのナショナルチームの選手が美深町に来たりする、ということでしょうか？
石：いまも選手は美深にいます。今年は

12月の半ばぐらいから、常に誰かがいるような状態ですね。

＜J＞ずっと合宿しているのでしょうか？
井：合宿でも入っています。でも、今の時期は町が3ヶ月間ですが雇用していません。例えば、トリノオリンピック代表の逸見佳代選手はナショナルチームを引退していますが、2月いっぱいには美深町にいました。指導者は1ヶ月毎の交代制で、2月末からは倉田選手に指導者として活動してもらっています。選手の方には、指導してもらいながら、トレーニングをしてもいいかなと思います。セカンドキャリア的な関わり方ともいえると思います。

石：ナショナルチームの合宿があるときにはナショナルチームのコーチである松井コーチやデビッドコーチも指導してくれそうです。

＜J＞ナショナルの選手であったり、コーチであったり町に来てくれて、指導をしてくれる、というのは子どもにとってのもちろん、保護者の方にも刺激になるのではないかと思います。
石：子ども達はあまり、選手を意識していません。非常に近い存在なので、いつもエアリアルを教えてくれていてお兄さん、お姉さん、という感覚みたいです。

井：保護者の方は日本のトップの選手に教えてもらっている、ということではびっくりしているようです。例えば選手が公開しているブログに、子どもの親から「先生はオリンピックで活躍された選手だったんですね」というメッセージが入っていた、なんてこともありました。

＜J＞そういった意味では選手と町の人々が本当に近いところにいるんですね。こういう環境が町を挙げてエアリアルを応援しよう、という雰囲気につながっているのかと思います。
井：あと、学校の授業にも協力してもらっています。石坂先生がそのあたりの調整を全部やってくれています。

石：学校体育なので、選手にはスキーのおもしろさを伝えてもらっています。例えば、これまでの授業では整備された斜面でしか子どもを滑らすことが出来ませんでした。選手の方にはいろいろなゲ



北海道教育庁生涯学習部 井上 規之氏

レンデでの滑り方や、ジャンプの仕方を教えてもらっています。彼らは専門家で、私たちがよりずっと安全に、上手に教えることが出来ます。子ども達は今まで知らなかったスキーの楽しさを味わっていると思います。

井：従来から美深町では町の指導員の方から、スキーの指導を受けていたのですが、これとは違ったよさがあるのかな、と思います。こういった経験が、子どもがスキーをすきになり、少年団に子ども達が入ることにつながっていると思います。

＜J＞うまく美深にあるリソースを活用しているんですね。
井：今年の3月には美深町でエアリアルの全日本選手権と北海道選手権が開催されます。実際に美深町でトランポリンをしていた高校生が、去年の夏に初めてウオータージャンプを飛んで、現在では雪上で回転できるように、この大会に参加します。理想はスキージャンプの下川町のように、美深出身の選手が世界選手権代表の大半を占めることが出来るようになると思います。ただ、子ども達にはそれぞれ個性があります。ですから、エアリアルに限らず、今後は下川町など近隣の町と連携しながら子どもの特色に合わせて種目を選択できるような仕組みを形成できれば、と考えています。

例えば、美深でジャンプをしたい子どもは下川に練習に行き、逆に下川からエアリアルをした子どもが美深に来る、といった形の総合型スポーツクラブです。そうすることでスキーが盛んになり、日本の冬季種目の競技力向上につながればいいですね。

2年前のニュースレター（季刊ニュースレター JISS Vol.15 Spring 2005号）で、福岡県がタレント発掘への取り組みを開始することを取り上げた。あれから2年たった、福岡県の事業も着々と進展し、岡山、和歌山など福岡の動きに追随する自治体も出てきた。今回は県立スポーツ科学情報センターの中西氏にこれまでの活動で出てきた成果や、新たな課題について伺った。

＜J＞S（以下、J）：福岡のタレント発掘が始まって2年間過ぎました。
中平（以下、N）：この2年間の取組をお話して、立ち上げたときには見えなかった。子どもがスポーツに取り組み際のシステムの歪み、が浮き彫りになりました。例えば、福岡のプログラムでは小学校から中学校に上がる段階で、自分が主に取り組む種目がある一定の枠から選択する、というプロセスがあります。ここで自分がやりたいという種目や、これが向いているだろうという種目がわかってくるわけです。この種目を自分の地域で取り組む環境を探そうとする、かなりの子どもたちが、その種目を実施できる環境がないという問題が出てきてしましました。いまでもそのようになったらどうしようと思いましたが、そういった課題に気づくことが出来た。これはよくはないことですが、取組ではあると思います。こういった課題を競技団体、学校、教育関係の人たちに気づいていただくことで、何とかしてはいいけない、という空気が広がってきました。これはタレント発掘事業がもたらした副作用なのかもしれません。

＜J＞もう少し詳しくお聞かせ下さい。
N：これまでの子ども達とスポーツとの出会いは、身近にあるクラブやサークルで行われる種目に限定されており、そこでは、子どもの能力や適性への配慮はあまりなされていませんでした。また、そうしたクラブやサークル、部活動においても、指導者がいなければなくなってしまうという実態もありました。子どもが少なくなると、先生の数も少なくなってしまう。学校の休部廃部になっ

